

A
305871

H. E. Wein|gent

Künstler plaudern



Wilhelm Simpert · Verlag · Berlin

カール・シューリヒト オーケストラが逃げ出した！

翻訳：西浦 AI

今もなお、人生の闘いの中で、最もよく耐え抜けるのは厳しい試練の学校を通った人々だ。敗北は、勝利に耐えるために必要なものだ。カール・シューリヒトは、自由闊達に自らの道を語る。それは決して平坦なものではなかったが、この長い道のりを振り返る時、彼は頂点へと徐々に導かれたその道程にまつわる思い出のどれ一つとして、手放したくないと告白する。それらが陽気なものであれ、深刻なものであれ。

「ダンツィヒのマリエン教会の陰で、私は育った。古いロマンチズムの魔法と、脈打つ現代の流れの狭間で。私が生まれた時、父はもういなかった―悲劇的な運命が彼を呼び去った。祖父の工房で作られたオルガンを携え、父は祖父と古株の職人とともに、海を越えてプツィヒへと向かった。あのダンツィヒ湾の半島へ々と本土の間の小さな町で、新しい楽器を据え付けるためだった。1880年の6月のある日、帆船は穏やかに青い東海の水面を滑っていた―が、外海で波が高くなると、風が急変し、帆桁の一つが職人を胸に打ち、均衡を失わせて海に落とした。父は迷わず飛び込み、彼を掴んだ。必死に波と闘ったが、不運にも救助ボートが船員の手から離れ、流されてしまった。助けは遅すぎた。祖父の目の前で、二人は波間に沈んだ。数週間後、私は生まれた。

こうして、私の人生の始まりはすでに影に覆われていたが、若い頃の人間は今に生きるものだ。

ポッゲンプフルの家では、神秘的な叩き音と槌音が響いていた。忙しい制作と労苦の音―オルガンのパイプ一つ一つが手作業で作られ、風箱機構、登録装置―すべてが家内の工房で生み出されていた。クリスマスの時期になると、家族全員が職人や見習いたちとともにクリスマスツリーの周りに集まり、部屋中がろうそくの薄暗い光に包まれる。母はピアノに座り、私たちは歌やコラールを歌った。

夏には、音楽好きの仲間たちと外へ出かけ、オリヴァの静かな森の谷を探し、神の自由な空の下でシューマンや他のドイツ作曲家の合唱曲を歌った。私は幼い頃から教会に連れていかれ、オルガニストの演奏に耳を傾け、教会音楽に触れた。そうして、次第に、ほとんど気づかぬうちに、音楽的なものが私の心に広がり、重要さを増していった。

母は、厳しい運命の打撃を受けた後、私と二人きりになったが、自立しようとした。彼女は強く、誇り高い魂だった。そこでペンションを開き、何とかやりくりした。母は、私が音楽に次第に魅了されているのを感じ取り、最初は自分でピアノを教えてくれた。私は四、五歳の頃だった。

八歳の時、初めて大きなコンサートを訪れた—はつきり覚えているが、『ローエングリン』と『魔弾の射手』が演奏された—私は音の不思議な世界にすっかり捕らわれた。

母の兄弟が、フィリピンで暮らして富を築き、故郷に戻ってきた。彼は姉の苦勞を見て—祖父の死後、一族の本家は他人の手に渡り、後に廃れた—私たちをベルリンに移住させ、私の教育を負担すると約束した。当時、私は帝都のギムナジウムに通っていたが、もう一つの才能が現れた：私は絵を描き、主に風刺画を。ピアノに加えてヴァイオリンのレッスンも始まり、小さな作曲—歌曲やピアノ曲—も試みた。私は当然、独学だった。すべての知識を自分で身につけた。劇的な試みとして、南米のロマンチックな物語『ドン・ルイス』をオペラ化した。マリオネット・オペラで、家で上演した。家の人々、知人、友人たちが観客だった。友人が人形の糸を操る間、私は小さな舞台の後ろでピアノを弾き、すべての声—ソプラノ、アルト、テノール、バス—を歌った。恐ろしいガラガラ声だった、ちょうど声変わりの時期だったから。叔父が再び訪れた時、彼は私の身体的な成長を考えるべき時だと言い、都会の空気から健康的な気候へ移すことを提案した。ミュンヘン、シュトゥットガルト、ヴィースバーデンを挙げ、運命がヴィースバーデンを選んだ。あの町は後に私にとって特別な意味を持つことになる。

まるで、貧困夫人が私たちの忠実な伴侶のように思えた。一夜にして叔父は財産を失い—再び、私たちは厳しい人生に独り立ち向かった。だが母は闘いを挑み、決然と再びペンションを開き、私たちを支えた。苦しい時代だった、確かに、だがそれは自己を確立する力を与えてくれた。狭い生活基盤を広げるため、私は中等学校の生徒として補習レッスンをし、学校を辞めて音楽に専念するようになると、スペイン語やポルトガル語の小説や短編を翻訳して地方新聞に売り、乏しい財布を補った。」

音楽を生涯の職業とするきっかけを与えたのは、実はオットー・ドルンだった。有名な作曲家ハインリヒ・ドルンの息子で、彼自身も作曲家で音楽学者だった。ロベルト・シューマンの作曲教師だった人物だ。私は彼に自分の作品をいくつか見せ、意見を求めた。彼の言葉は：「絶対に音楽家になれ」だった。オットー・ドルンを通じてヴィースバーデンの音楽界に入り、私を無償か低料金で教えてくれる人々に出会った。私は他の音楽学生たちと組んで小さなオーケストラを作り—当然、閉ざされた部屋で—ハイドンのシンフォニーや他の作品を演奏した。

20歳の時、マインツの市立劇場でコレペティートルとして働くことができた。そこで独唱パートや合唱を指導し、時折歌劇やクリスマス・バレエを指揮した。このマインツでの仕事は一銭の報酬もなかったが、私にとっては訓練となり、一歩前進だった。しかし、12時間連続で働き、体に最低限の栄養しか与えないのは利点とは言えなかった。一年後、私はドルンの助言でベルリンを去った。彼は私に300ライヒスマルクを集めてくれ、少なくとも最初の時期を心配なく過ごせるようにしてくれた。

この頃、私は大の自然愛好家として、故郷芸術の精神で活動する詩人たちの作品に触れた：ハインリヒ・ゾーンライ、フリッツ・リーンハルト、アドルフ・バルテルス。私はリーンハルトがベルリンにいることを知り、自然の中で、田舎の静けさで、孤独

な山の散策で高揚した人生観を見出す彼に、友を見出せると望んだ。知人と一緒にベルリン行きの列車に乗った。ヴァイマルで扉が開き、一人の紳士が席があるかと尋ねた。私たちは頷き、彼は乗ってきた。彼がワーグナーの『トリスタン』の台本を読んでいるのに気づき、私は自分の計画を話し続け、ゾーンライとリーンハルトに会いたいと語った。すると向かいの紳士が顔を上げ、「君、音楽家らしいな『トリスタン』を少し手伝ってくれないか、よくわからないんだ」と言った。私は喜んで助け、すると彼は「君がゾーンライとリーンハルトのことを言っていたな――一つは叶えてあげられるよ、リーンハルトは私の親友だ。ベルリンで正しい住所に行くために、この私のカードを音楽大学で有名な作曲家でピアノ教師のエルンスト・ルドルフ教授に渡せ」と言った。

それは幸運な出会いだった！私はすぐにリーンハルトを訪ね、たちまち音楽的に意気投合した。私は彼の家で七時間過ごし、私の作曲すべて―彼のテキストを使った歌曲など―を演奏した。それからルドルフを訪ね、こうして音楽大学に入った。エンゲルベルト・フンパーディンク、有名な作曲家が私の作曲教師で、ルドルフがピアノを教えた。彼は私に 3000 ライヒスマルクの私的奨学金を手配し、すべての心配から解放してくれた。フンパーディンクは生徒の才能を鋭く見抜く人で、後年、私がすでに指揮者になってから出会った時、「なぜ作曲をやめたんだ？ 指揮がそんなに価値があるのか？ 私は君の作曲の才能を高く買っていたのに！」と言ってくれた。私は誇らしかった。

一年後、支援者たちがさらに資金をくれ、二年間の旅を可能にした。静かな場所で働き、重要な音楽公演やリハーサルを見学した。それから実践へ。

私はいわば基礎から学んだ。最初はバート・クロイツナッハとドルトムントで夏のコンサートを指揮し、次にツヴィカウでオペレッタを指揮した。そんな公演で一度、合唱として参加したことがある。第二指揮者がミロケルのオペレッタ『七人のシュヴァーベン人』を上演したかったが、団員が足りなかった。そこで市民から補強を募ったが、彼らは惨憺たるものだった。仲間に助けるため、私は衣装を着て七人のシュヴァーベンの最後の一人になった。彼らは長い槍を持って進むことで知られる。私の役割は素人たちの演技を活気づけ、タクトに合わせるよう見張ることだった。出番が来るたび、槍を強く引く―それが合図だった。特に大衆シーンは難しく、補助要員を雇ったが、戦闘シーンで両グループが混乱し、味方が敵かわからなくなり、舞台上で大乱闘になった。観客は首を振って帰った―『七人のシュヴァーベン人』は以後上演されなくなった。プログラムには私の名前が載っていた；偽名は「ヘルファー氏」だった。

ツヴィカウから、私は当時ライプツィヒにいたマックス・レーガーを訪ねた。師に私の印刷された作品―ピアノソナタ、歌曲、前奏曲、交響詩―を見せ、意見を求めた。彼は好意的に認め、実践を続けろと助言した。レーガーは作曲しながら友人を受け入れ、テーブルで働きつつ会話に参加し、まるでただ写譜しているように見えた。そこで私は優れたヴァイオリン奏者で作曲家のアンリ・マルトーを知った。彼はライプツィヒ音楽院のマスタークラスを率いていた。彼の推薦でゴスラー市の音楽監督になり、シンフォニーオーケストラ、男声合唱団、オラトリオ協会を指揮した。一年後、

フランクフルト・アム・マインに移り、有名なリュールのオラトリオ協会の指揮者になった。

この仕事で、ハイドンの『天地創造』、ベートーヴェンの『莊嚴ミサ』、バッハの受難曲などの大作を指揮した。近隣の町で合唱コンサートも開き、すぐに知られるようになった。1912 年、ヴィースバーデン市の音楽総監督に 78 人の応募者から選ばれた。この職を今も務めている。当時はシンフォニーコンサートに加えクア音楽で約 100 回のコンサートを指揮したが、今は 12 回だけだ。私のコンサート活動が大きく広がったからだ。当然、そんな広範なプログラムで、古典、ロマン派、新ロマン派、現代の全音楽文献を学んだ。

ヴィースバーデンから、私の海外活動が徐々に広がり、戦争で中断された。1926/27 年の冬にベルリンで初めてフィルハーモニカーを指揮した。ここ数年、7 月から 8 月の夏にスケフェニンゲンでシンフォニーコンサートを指揮している。それはクア音楽ではなく、絶対的な芸術的水準で、世界的なソリストが参加する。私の最初のスケフェニンゲン時代、オランダ語に不慣れだった時、奇妙な誤解が起きた。リハーサルで、ある箇所を何度も繰り返させ、解釈が正しくないと思った。やっと滑らかになった時、「今はすべてクリアだ」と言った。「klar」という言葉で、ミュージシャンたちは驚いたことに立ち上がり、楽譜を閉じて帰り支度を始めた。誤解が解けた：オランダ語で「klaar」（二つ目の a 付き）は「終わり」という意味だ。オーケストラはリハーサルが終わったと思ったのだ。

これが私の芸術の道—ご覧の通り、決して容易ではなかった。私は無意識のうちにコンサート活動に成長し、劇場から始め、オペラを熱愛するが、結局、作曲家は沈黙を強いられ、指揮者が前面に躍り出た。」



出典：Harry Erwin Weinschenk, “Künstler plaudern”, p. 310 – 317, Wilhelm Limpert Verlag (1938).

[https://digitalisate.sub.uni-](https://digitalisate.sub.uni-hamburg.de/recherche/detail?tx_dlf%5Bdouble%5D=0&tx_dlf%5Bid%5D=14571&tx_dlf%5Bpagegrid%5D=0&cHash=609de9a1973207d87b2d18dee10918b7)

[hamburg.de/recherche/detail?tx_dlf%5Bdouble%5D=0&tx_dlf%5Bid%5D=14571&tx_dlf%5Bpagegrid%5D=0&cHash=609de9a1973207d87b2d18dee10918b7](https://digitalisate.sub.uni-hamburg.de/recherche/detail?tx_dlf%5Bdouble%5D=0&tx_dlf%5Bid%5D=14571&tx_dlf%5Bpagegrid%5D=0&cHash=609de9a1973207d87b2d18dee10918b7)